

## ゾルゲ事件の三つの物語—日本、米国、旧ソ連

早稲田大学客員教授 加藤 哲郎

### はじめに

きょうは在日ロシア大使館で行われる初めてのゾルゲ研究会ということで、お招きいただきましたので、これから1時間ほどお話してみたいと思います。

はじめにお断りしなければいけないのは、私はロシアの専門家ではございません。ロシア語もできません。ゾルゲ事件について学術論文・著書を書いたことはありません。ただ、現代史の様々な問題を研究していきますと、ゾルゲ事件と関わる問題がございまして、この5年ぐらいでしょうか、日露歴史研究センターの白井久也さんたちにお招きいただきまして、講演という形で、3度か4度、お話ししてまいりました。また、モンゴル・ウランバートルで開かれた第4回国際シンポジウム「ゾルゲ事件とノモンハン・ハルハ河戦争」（2006年5月）では、報告もさせていただきました。

これら講演記録は、先程白井さんからご紹介のありました『ゾルゲ事件関係外国語文献翻訳集』に出ております。こんなかたちで、私もある程度外野からゾルゲ事件に関わるようになってきましたので、今日は、その総括的印象を、お話ししてみたいと思います。

本当は、私の同年輩の友人である、例えば法政大学の下斗米伸夫さんとか成蹊大学の富田武さんとか、ロシア史や日ロ関係の専門家がいますが、彼らは本日月曜で出てこれないということで、一橋大学を3月末で退職して多少時間が自由になった私が、ピンチヒッター風にお話しさせていただくということで、ご了解いただきたいと思います。

受付でCDを1000円で売っておりますが、この中に、私がこれまで話してきたゾルゲ・尾崎事件関連の講演記録と書評、写真などが入っています。写真の中には、ゾルゲが捕まったとき自室に飾っていた世界地図があります。この世界地図は、じっくり読み解くと実に面白い内容があります。関心のある方は、ぜひ見ていただきたいと思います。

半年前になるでしょうか、11月7日は、リヒアルト・ゾルゲ、尾崎秀実が1944年に死刑に処された日で、毎年白井さんたちの日露歴史研究センターほか関係者の方々が、墓参会を行っています。アメリカ歴史学会会長をつとめた入江昭教授もお見えになりました。私はそこで記念講演を行いました。この間、アメリカ国立公文書館でゾルゲ事件に関係する史資料が新たに大量に出てきておりますので、その中のいくつかを紹介する形で講演しました。その記録は『翻訳集』最新号（2010年3月No. 25）に出ております。また本日のCDにも入れてありますので、そちらの方を見ていただければと思います。

### ゾルゲは文明の守り手、反ファシズムの戦士

本日は、旧ソ連、現ロシアが、ドイツ・ファシズムに勝利して65周年を記念する会で、ゾルゲは、ロシアをファシズムから救った大祖国戦争の英雄ということになっています。

私は、ちょっと違った視角から見たいと思います。空間的には範囲を広げ、旧ソ連・現ロシアを救った英雄であるのみならず、地球人類を、ファシズム、日本軍国主義など「野蛮」から救った、いわば「文明」を守った守り手の一人であったという見方です。したがってそれは、リヒアルト・ゾルゲ一人に限らず、その周りにいた尾崎秀実以下多くの日本人、それからゾルゲ事件で捕まった人々、国籍でいえばドイツ人、ユーゴスラビア人等々いろいろいるわけです。関係者でいえば、アメリカ人もフランス人も中国人もいる。地球上の様々な国々で、ナチスや日本軍国主義と闘ってきた人々がいるわけです。その活動の一環だったという意味で、大祖国戦争の英雄であるとともに、文明を守った戦士の一人であったゾルゲ、ということをお話ししたいと思います。

もう一つは、時間的に、第2次世界大戦は1945年に終わりますが、それから60年以上がたち、改めてリヒアルト・ゾルゲの活動を評価するというときに、軍事的に戦争に勝利したあるいは敗北したという観点ばかりではなく、20世紀全体がどのように動こうとしていて、それに対してゾルゲはどういう役割を果たしたのかという観点から見てみたい。つまり、20世紀がファシズム、ナチズム、軍国主義、独裁という「野蛮」の方向に流れようとしていたときに、それをデモクラシー、自由、個人の自発性・自立性を守る「文明」の方向での大きなうねりが、第2次世界大戦のときに展開されました。その中でゾルゲやゾルゲ諜報団「ラムゼイ」機関が果たした役割、という話にしたいと思います。

## 各国で異なるゾルゲ事件の扱い

大きなことを話しましたが、実は、こういうことを数量的に計算することは、意外に簡単にできます。きょうお見えの方は、わりと年配の方が多いので、あまり使い慣れていないかも知れませんが、インターネットのグーグルという検索サイトに「リヒアルト・ゾルゲ」と入れてみます。すると日本語では、5550のウェブサイト上でリヒアルト・ゾルゲという人物が論じられていると分かります。この5000という数字は、それほど多くはありません。ある程度専門用語として定着しているという程度のものです。

それに対して「尾崎秀実」と打ち込みますと、2万5000、つまりゾルゲの5倍出てきます。日本ではゾルゲより尾崎の方がよく知られているようだ、と見えてくるわけです。

もっと便利なのは、インターネット上に、ウィキペディアという百科事典があります。執筆者が明確な、普通の百科事典・辞書ではありません。読者参加型の、日々訂正され書き加えられていく free encyclopedia です。日本語版では「フリー百科事典」と出ている。確かに「無料」です。しかし中国語版には「自由的百科全書」とでてくる。あらゆる権力・権威から「自由」な百科事典という意味です。英語なら、エンサイクロペディア・ブリタニカより収録項目数も読者数も大きい、巨大な百科事典です。

このウィキペディアは、世界の各国語版があり、それぞれの国で著名な、関心を持たれる人物についてのページが作られ、それぞれの言語で、辞書的説明が出てきます。例えば、英語版ウィキペディアの「リヒアルト・ゾルゲ」にどう書かれているか、中国ではゾルゲがどう扱われているか、ロシアではどうか、ドイツではどうか、朝鮮のハンゲルの世界ではどう扱われているかなどが、全部分かるようになっていきます。これを、夕べちょっと思いついてやってみたら、いろいろ面白いことが分かりました。

「ゾルゲ」で、ページ数が一番多いのは、日本語版より英語版の方です。写真も豊富です。A4版で刷りますと6ページぐらいになります。日本語では4ページ分ぐらい、ロシア語で3ページぐらい、ドイツでは母国であるはずなのに、それほど書き込まれておりません。やはり3ページぐらいになるでしょうか。中国語・ハングルで2ページぐらいあります。各国語版で、それぞれ説明内容も、参考文献・注も違います。

内容的には、英語版では圧倒的に「スパイ・ゾルゲ」となります。単にソ連のスパイということではなく、全世界の諜報活動、スパイ活動の歴史的英雄としてのゾルゲということで、ゾルゲから学ぶことが、このIT時代に世界の情報を集める上で大切だという観点で扱われていることが分かります。

日本語版で「尾崎秀実」等の項目とあわせて読むと、「ゾルゲ・尾崎諜報団」という形で、第2次世界大戦中に日本の政治・軍部の最高の情報をソ連に流したスパイであるけれども、同時にこのグループが、愛国者つまりソ連や日本という国を愛する人々であったのか、それとも売国奴、つまり国を売る人々であったのか、あるいは国籍を離れたコスモポリタンな国際主義グループであったのかについては、論争があることがわかります。

ドイツでは、あまり研究が盛んではありませんから、ドイツ語版ウィキペディアの「リヒャルト・ゾルゲ」には、参考文献もあまり出てきません。日本の研究の翻訳はありません。多くは英語のディーキン＝ストーリィ（『ゾルゲ追跡』の共著者）とかプランゲ（『ゾルゲ 東京を狙え』の著者）、チャルマーズ・ジョンソン、新しいものではワイマント（『ゾルゲ 引き裂かれたスパイ』の著者）等々が参考文献に出てきます。ただ一つ、日本語文献があります。「手塚治虫」です（笑い）。Osamu Tezuka: *Adolf 4: Zwischen den Fronten*. Carlsen-Verlag, Hamburg 1983.とあります。何かと言いますと、日本語で『アドルフに告ぐ』というコミックです。それは英語、ドイツ語その他各国語に訳されていて、しかも簡単ではありますが、手塚治虫のマンガの中でゾルゲ事件が扱われています。ドイツ人は、日本の研究情報を、手塚治虫を通じて知る、そういう形で、ゾルゲの名前が残っています。なぜそうなるかについては、もう少し後で、また触れます。

中国語版もありますが、つい最近日本で翻訳された楊国光さんの『ゾルゲ 上海に潜入ス』（2009年 社会評論社）は、ウィキペディアには出てきません。これには複雑な事情があります。日本で読める中国語版ウィキペディアは、台湾で作られています。中国大陸では、ご存じのように、中国政府と米国政府のあいだで、インターネット検閲が大きな問題になっています。ウィキペディアは辞書ですから、その内容と運用は、デリケートな問題です。ですから中国語の大陸版、中国共産党公認の百科事典には、英語版から直接には入れません。こういう形ですから、一応中国語頁もあるんですが、「ドイツとロシアの混血」で「20世紀の有名な間諜」とあり、どうもロシア語のゾルゲについてのページに近いものようです。参考文献も、中国語版には一切ありません。

### 1941年の軍人・英雄としてのゾルゲ像—ロシア

ロシア語版ウィキペディアはどうかというと、日本よりちょっと小さいくらいです。内容は、写真がたくさん出ていますが、軍服、勲章、記念切手、記念碑など、ミリタリーなゾルゲ像が出ています。いわば「赤軍第四部諜報英雄ゾルゲ」であり、それが大祖国戦争

でわが国を救った、だからソ連は生き残り、今日のロシアがあるという観点のもので、ロシアにおけるゾルゲの扱いは、「軍人」「英雄」です。

私みたいな政治学者から見ると、ゾルゲの書いた論文がたくさん残されていて、例えば2・26事件についての分析は、当時のあまたの評論家、新聞記者のものに比べても抜群に優れた学術的意味があり、学者としての資質を示しています。すぐれた知識人です。しかし、そういう面は、ロシアではあまり評価されていないようです。

しかも、扱われている時期が、ロシアの場合は1941年、つまり突如独ソ戦が始まる、バルバロッサ奇襲作戦がある。そこでゾルゲが在日ドイツ大使館から情報を取りソ連本国に警告を送っていたという話と、もう一つは、先程白井さんから話のあった、日本軍が南に行くのか北に行くのか、ソ連との戦争になるのかどうかの問題について、日本の御前会議の南進政策決定を報告したということになっています。

どうしても「1941年のゾルゲ」「軍人ゾルゲ」という、ある意味では狭い範囲でのゾルゲの活動に焦点が当てられているというのが、ウィキペディアから見たロシア語のゾルゲの物語になります。

そこで、なぜこういう物語になるのか。なぜそのように国別・言語別に違うのかということ、これからもう少し詳しく、ゾルゲと尾崎が逮捕された1941年以後、それぞれの国でゾルゲ事件がどのように扱われてきたのかという流れを見ることによって、お話ししてみようと思います。

結論と言いますか、単純化して分かりやすい話にします。日本では、先ほど言った「愛国者か売国奴か」という、尾崎秀実の評価に準ずる形でゾルゲ事件が論じられ、主役は尾崎秀実の方です。ゾルゲは、いわばそれを後ろから指導していた人物、したがって、尾崎の評価によってゾルゲの評価が決まってくる。舞台は、ほとんどが東京です。

しかし、そうではない研究をしている国もあります。ロシアの場合はどうなるかと言いますと、主人公は圧倒的にゾルゲです。尾崎は出てきますが脇役、ロシア語版ウィキペディアでは立項もされていません。個人としてそれほど重要な人物と扱われていないわけです。その意味で、主人公がゾルゲで、ゾルゲ諜報団があって、無線技師マックス・クラウゼンとかいろいろいるけれども、あくまで優れた英雄スパイであるゾルゲの下で活動した諜報員たちです。舞台も時間的にも限られ、「1941年のモスクワと東京の二点をつなぐ線」が、ロシアにおけるゾルゲ事件の扱いの基本的な位相です。

## 米国の関心はスメドレーら中国にいた米国人協力者

それらと大きく異なるのが、米国における扱いです。20世紀のすぐれたスパイ・諜報活動家としてのゾルゲという話は出てくるのですが、ゾルゲ事件そのものはどう扱われているかという、大きな特徴は、米国の関心は東京でもモスクワでもなく、上海つまり中国にありました。ゾルゲが主人公であることに変わりはありませんが、米国にとっての副主人公はアグネス・スメドレーであり、その回りにいるエドガー・スノーら、当時中国に住んで、中国共産党の活動を英語で世界に広めていた米国人です。

米国でゾルゲ事件が知られるようになったのは、米国占領軍が日本にやって来て、どうも真珠湾奇襲の直前に日本ではゾルゲ事件というソ連共産主義のスパイ団を捕まえた事件

があつたらしい、その記録を全部集めて分析すると、米国人も関係していたらしい、米国人でありながら共産主義のために働いた連中を告発できる、そんな問題設定です。

ちょうど、1940年代後半から50年代初めは、いわゆる東西冷戦の始まりの時期になります。その時期、米国ではマッカーシズムとして知られていますが、米国人でありながら米国の情報を戦後の敵国ソ連共産主義に売っている人物が、国務省、国防省や、場合によっては戦時の諜報機関（CIA中央情報局の前身のOSS戦略情報局やOWI戦時情報局）の中にまでいたのではないかとということで、米国における非米活動つまり Non American Activity をする人々が追及された。

その時に、恰好の素材にされたのが、ゾルゲ事件です。有名なGHQ・G2（陸軍情報部）ウィロビー報告は、Shanghai Conspiracy つまり「上海の陰謀」というタイトルで本になります。日本語では『赤色スパイ団の全貌 ゾルゲ事件』（1953年、東西南北社）となっています。上海において世界的な東西冷戦の芽が、既に1930年代に始まっていた。リヒアルト・ゾルゲを中心としたソ連のスパイ・グループの中に米国人も組み込まれていた。その代表がアグネス・スメドレーで、彼女と一緒に活動した日本人たちもいる。さらに米国共産党員で日本で活動した宮城与徳もいるということが、米国にとっての最初の関心になります。ウィロビー報告から始まった反共、非米活動告発の枠のなかで、その後の英語圏のゾルゲ事件研究と普及がなされていくということになります。

ですから、007みたいなスパイの世界と、篠田正浩監督が映画「スパイ・ゾルゲ」で描いた上海租界での各国間の情報戦の接点が、米国にとってのゾルゲ事件のイメージになります。

### 尾崎秀実が主人公で愛国者か売国奴か評価が分かれる日本

インターネットを離れて、ゾルゲ事件についての研究の流れから見ていくとどうなるか。日本はやはり「主人公は尾崎秀実、舞台は東京」ということになります。

1941年にゾルゲ諜報団が捕まり、尾崎は国防保安法、軍機保護法、治安維持法違反等いくつもの罪状を付けられて逮捕され、新聞に発表されるのは太平洋戦争が始まった後の42年です。その後日本では、いくつかの節目でゾルゲ事件が社会的にも知られるようになり、かつ研究も進んできた、という流れがあります。

最初は、戦後すぐの1946年、尾崎秀実が妻と子供にあてた獄中書簡が『愛情はふる星のごとく』（世界評論社版）として発行され、ベストセラーになります。その時に、手紙の内容から見て、尾崎は果たして戦時中に軍から発表されたような恐ろしいソ連スパイだったのだろうか。すごい知性の持ち主で、家族に対して温かみもある。これはむしろ、理不尽な戦争に反対し、ソ連のためばかりでなく日本の民衆をも戦争の惨禍から守るための反戦活動、愛国的な活動だったのではないか。初めは Kommunismus を信じていたようであるが、ある時期から東洋的なものに惹かれていくところから、彼は転向したんだろう、というふうな議論が起こってくる。戦時中に発表された、おどろおどろしいゾルゲ・スパイ団のイメージから、「平和主義者・愛国者」尾崎を軸にグループの活動を見直そうという動きが、日本では生まれてくるわけです。

これに水を差すように、GHQ特にG2陸軍情報部のウィロビー将軍が、ゾルゲ事

件に異常に関心を持ち、先程言ったように、どうもゾルゲ・グループの中に米国人も入っていて、その米国人は非米活動を行っていたのではないかという観点から、スメドレーを中心とした上海における米国人の活動を、東京にいた尾崎、宮城与徳やゾルゲ、ブーケリッチ、クラウゼンらを含むゾルゲ諜報団の活動とを何とか結び付け、共産主義はこんなにもアジアに浸透していたのだ、一部の米国人はそれに身を投じたのだという、いわば「売国奴としてのスメドレー」以下、米国人コミュニストを非米活動をでっち上げる。正確にいうと、でっち上げでなかった部分が『ヴェノナ』文書等で最近明らかになっているんですけども、膨大な資料をカネに糸目をつけずに集め、記者会見、新聞・雑誌報道、報告書の作成で大々的に宣伝しました。これが、ウィロビー『赤色スパイ団の全貌—ゾルゲ事件』です（と言って原書を掲げる）。裏側にはちゃんと「Shanghai Conspiracy」と原題があるんですが、邦訳の表紙の方は日本のスパイ団という扱いになっています。

### マッカーシズムを主導したウィロビー報告

半年前のゾルゲ・尾崎墓参会記念講演で、米国国立公文書館文書とゲティスバーグ大学ウィロビー文庫を用いて話しましたが、ウィロビーが報告した内容は、米国にとってスメドレー以下ゾルゲ事件の関係者たちの活動が反米的、つまり米国の国益に反する諜報活動を行っていた、ということ告発したものです。実は現在、米国ではウィロビー報告が作られるまでに彼が集めた様々な記録、第一次資料が閲覧できるようになっています。これを見ますと、報告書で使ったのはその収集資料のほんの一部で、しかもマッカーシズムにとって都合のいい部分だけをつなぎ合わせて作られたことが分かります。

この本で書かれていることの何十倍もの記録をウィロビーは集めています。日本語で言えば、裁判記録だけでなく雑誌や新聞の記事も全部英訳して、それらの中から彼らにとって都合のいい部分を拾って、一つのストーリー、つまり中国で毛沢東の共産党を助けた米国人たちと、日本にいてモスクワに情報を送っていたゾルゲや尾崎たちのグループがいて、これがスメドレーを媒介に日本と中国の両方で活動していた、となります。

このうち日本にいたグループは、1941年に日本の特高警察によって逮捕され一網打尽になるが、中国に残ったグループは、その後も存続する。しかも1945年以降、国共内戦があり、49年には新中国が生まれる。その時にこの本が発表されるわけです。つまり北京の毛沢東らの共産中国の建設に、こともあろうに米国人が貢献している、彼らはソ連に日本の情報を流したゾルゲたちと同根でつながっていたというのです。それを告発するための記録が、このウィロビー報告です。

ウィロビー・ペーパーは、スタンフォード大学、ゲティスバーグ大学、マッカーサー記念館等に分散してありますが、そういうものの中からいろいろ分かってくる構造があります。赤色スパイの脅威、尾崎はやはり売国奴だった、ゾルゲ・尾崎グループの祖国はソ連だったと、いう話に持っていくのが、ウィロビーの目的なのです。日本のマスコミや世論も、朝鮮戦争や日本共産党の50年分裂のなかで、そちらの方に巻き込まれてしまう。

その流れの中で、状況がまた大きく変わるのが、1962年になります。転機となったのは、みすず書房『現代史資料』の刊行です。尾崎、ゾルゲらの裁判記録が見つかって、みすず書房から1962年『現代史資料：ゾルゲ事件』が第1巻から第3巻にまとめて発

表されます。これは、客観的な裁判資料、裁判の中での尾崎やゾルゲの供述や判決が載っているもので、官憲資料ではあるが学問的に、つまりアカデミックにもゾルゲや尾崎の思想や歴史的役割を改めて論ずることができる環境として決定的でした。

のちに米国のチャルマーズ・ジョンソンが、1962年にみすず書房の「ゾルゲ事件」が出て、翌1963年に藤原彰教授の書評論文が日本の『歴史学研究』誌に発表されると、日本の高名な歴史学者がゾルゲ事件を扱っているということでびっくりし、自分も本格的に学術的にやってみたいと思い、資料集を取り寄せて読んだということを書いています。愛国者か売国奴かといった尾崎の人物評価だけでなく、もっと大きな歴史の中にゾルゲや尾崎の活動を位置づけていこうという流れが、大体1960年代、特にみすず書房の『現代史資料』刊行から始まります。

この時代に、通説的に流れた日本におけるゾルゲ事件についての一般的な理解は、いくつか伝記や書物も出ていましたが、おそらく読みやすさ、関係者が書いているということから、尾崎秀実の義理の弟である尾崎秀樹の本です。『ゾルゲ事件—尾崎秀実の理想と挫折』（中公新書）が1963年に出版されて広がります。この本が、日本におけるゾルゲ事件の、いわば通俗的な理解の定番になっていきます。ゾルゲ事件を世間に広めるのに重要な役割を果たした尾崎秀樹は、自身が文芸評論家で日本の大衆文化の研究者でした。1959年に『生きているユダ』を書き、特高によるゾルゲ事件関係者の逮捕のきっかけを作ったのは戦後日本共産党で活躍した伊藤律農民部長（当時）であったという、もともとウィロビー報告にあった説を定着させた。伊藤律の警察で供述した内容の中に米国帰りの共産党員である北林トモが出てきた、警察が北林トモの線を追いかけていたら宮城与徳につながり、宮城からゾルゲ事件が芋づる式に分かったという話です。

### 川合貞吉はウィロビーのエージェントで崩れる尾崎秀樹の立論

ゾルゲ事件発覚伊藤律供述端緒説は、すでにウィロビー報告中にあったことです。それを通説化したのが、尾崎秀樹の伊藤律＝「生きているユダ」説でした。尾崎秀実が愛国者であったならば、本来その活動を助け黙秘すべきであった共産主義者の伊藤律が、官憲に供述し尾崎を売ったという話になったわけです。

伊藤律自身は、中国に長く軟禁されていて、1980年にようやく生きて帰ってきます。そこで自分は尾崎を売るようなことをした覚えはないと言いだします。そのあたりから、どうも尾崎秀樹の書いた『ゾルゲ事件』の筋書きは怪しいのではないかということで、きょうあとでお話になる渡部富哉さん（社会運動資料センター代表）の『偽りの烙印—伊藤律・スパイ説の崩壊』（五月書房 1993年）をはじめ、新しいゾルゲ事件の研究が、日本でも次々に出てくることとなります。

これまでは日本側裁判記録とアメリカ側ウィロビー報告が中心でしたが、ソ連が崩壊して旧ソ連秘密文書が出てきたことで、1941年に限定されないゾルゲ自身の活動の記録も出てきました。いわば官憲資料によらない学術研究の条件が、ようやく整ったわけです。

この点は、結論だけを申し上げておきますと、伊藤律が発覚のきっかけだったという説は、渡部さんたちの綿密な論証で、間違いだということが分かってきました。

私が米国で調べてきたことから言いますと、尾崎秀樹はウィロビー報告が発表されたこ

ろに「ゾルゲ事件真相究明会」をつくり、何とか尾崎やゾルゲは真の愛国者であったという方向での名誉回復を図ろうとしていた。そこで秀樹が一番頼りにしたのが、尾崎秀実の同志と称する中国時代の友人川合貞吉でした。尾崎秀実やスメドレーと一緒に、ゾルゲ諜報団のメンバーだったから、上海時代の自分は唯一の生き残り証言者だと言っていた人です。この川合の戦後の証言が、伊藤律発覚端緒説を含め、尾崎秀樹の『ゾルゲ事件』の基本的なベースになっています。

ところが米国から出てきたウィロビーの収集文書を見ると、川合貞吉は、「ゾルゲ事件真相究明会」の活動期に、G 2 ウィロビーの悪名高いキャノン機関から、月に2万円（55ドル）をもらって日本の共産主義者の情報やゾルゲ事件についての情報を米国に売っていたことが、明らかになってきました。つまり、川合貞吉証言は、GHQ・G 2がスメドレー情報を集めるために秘かに進めた工作活動の一環であり、川合は、スメドレーや尾崎他日本人の情報を高く売りつけ、それがウィロビー報告など米国側発表のもとになったのです。尾崎秀樹が、まんまと川合に騙されて、背後にあった米国の情報工作に気づかずに広めたのが日本でのそれまでの通説だったことが、アメリカ側資料からわかりました。

### ゾルゲも尾崎もたんなるスパイではない

日本では「尾崎中心、東京中心」で、「愛国者か売国奴か」が論点でした。尾崎はゾルゲの忠実な第2バイオリンであったが、同時に知的で人間的にも魅力がある非常に優れた諜報員だったという評価でした。しかし私は、尾崎がスパイであったかどうかという単純な点についても、簡単には賛成しかねるところがあります。というのは、確かに尾崎からゾルゲを通じてモスクワに送られた情報はたくさんありますが、その非常に多くの部分は、彼らが新聞・雑誌や新聞記者から入手したり、近衛首相の朝飯会で知りえた断片的事実で、ゾルゲがそれらを分析・加工して、モスクワに送ったわけです。

尾崎はもともとジャーナリストですから、ソ連に無電で送られたのと同じ主旨の内容を、1939年から41年にかけて、当時の新聞・雑誌で記事や論説にしている。『朝日新聞』や影響力ある雑誌『改造』に寄稿した論文もある。その公開された情報内容とそれほど変わらないことを、モスクワに送っていた。

ゾルゲにしても、確かに在日ドイツ大使館からトップ情報をとっています。同時に新聞記者として記事を書いています。一方でモスクワに情報を送りながら、他の新聞記者にスクープを漏らして世界の世論を盛り上げようとするようなことを同時にやっている。

一般にスパイというのは、ある国のための情報を秘かに本国に送るのが普通ですが、尾崎もゾルゲもあつけらんとしていて、私流に言うと「コピー・レフト」です。著作権を放棄したスパイです。諜報活動で知った内容が人類の未来にとって危険であると思えば、ソ連に送って警告を発するだけでなく、それを他の外国の新聞社に流したり、あるいは、戦時中のことですからぎりぎりの言葉で、奴隷の言葉を使いながら「やはり中国人民とは仲良くしようではないか」と示唆するような論調を、捕まる直前まで発していたのです。

尾崎は1941年に逮捕されますが、その年だけでも100本ぐらい論文を書いています。私でも年20本書けば、その年はもう疲れてだめですが、尾崎は1週間に2本も原稿を書いています。その内容は、ほとんど日中戦争をこれ以上拡大してはならないと警鐘を



鳴らすものです。これをどういうふうに考えるかが、尾崎、ゾルゲの活動を評価する際の一つの大きな問題になるということになります。

### ソ連では1964年の名誉回復・叙勲が転機に

では旧ソ連でのゾルゲ事件の扱いはどうか。ソ連の方は、わりと簡単です。1964年、フルシチョフ政権の末期、ブレジネフに変わるときですが、突如として9月14日付「プラウダ」にゾルゲの名前が出て、昔ゾルゲという人物がいてこのようにわが祖国を救ったとして、翌10月には英雄として叙勲されます。

これにもいろいろな説があって、フルシチョフがフランスで作られたイヴ・シャンピ監督の、岸恵子も出たゾルゲ事件をモデルにした真珠湾攻撃についての映画（日仏合作映画「スパイ・ゾルゲ 真珠湾前夜」）があり、クレムリンの奥の要人しか見られない西側映画の映写室でこれを見て、こんな立派なわが国のスパイがいたのかということ、これは何とかしなければということから始まったという説があります。これが俗説であることは、隣にいるフェシュンさんが、旧ソ連の文書を使いながら明らかにしているところです。それほどに突然だった。

ところが「大祖国戦争の英雄ゾルゲ」とソ連共産党が評価すると、立て続けに本が何冊も出るようになります。おまけにゾルゲがドイツ人で、マックス・クラウゼンもいたということで、65年には旧東独もゾルゲを称揚します。ドイツ側の資料をまとめた詳しい本、J. マーダー＝G. シュフリック＝H. ペーネルト 共著（植田敏郎訳）『ゾルゲ諜報秘録』は、1967年に朝日新聞社から翻訳が出版されています。

このように65年ぐらいから突如として、尾崎が「愛国者か売国奴か」という日本での論点で言えば、「愛国者」という延長上で、しかし日本の愛国ではなく、旧ソ連にとっての愛国者というゾルゲ像が作られていきます。それ以前に米国が流し、世界的に流通していたスパイ・ゾルゲ像に対抗していきます。「スパイで何が悪い、ファシズムと闘うためのスパイだったのだ」というゾルゲ像です。

ただし、ソ連や東独で出たゾルゲ本は、ゾルゲについてはさすがにそれなりに第一次資料もあり、しっかり調査していますが、尾崎秀実とか宮城与徳について書かれた部分は、あまり信用できません。調べてみると出所はウィロビー報告だったりします。

ゾルゲについては、1964年の名誉回復以後、ソ連でも研究と検証の流れができたけれども、「1941年の軍事的な英雄としてのゾルゲ、モスクワ・東京関係についてのゾルゲ」がずっと中心で、ゾルゲだけがどんどん局大化していく。ゾルゲ一人の力で第2次世界大戦を勝ったような記述まで現れるようになりました。少なくとも日本人にはそのように見える宣伝がされる。

これは、今から考えると余りよくなかったのではないか。あまりにもソ連を救ったゾルゲのイメージが強くなったため、尾崎秀実は別にソ連だけを救おうとしたのではなく、日本の民衆も中国の民衆も救おうとしていたのに、そちらの方は逆に見えなくなる傾向があります。「ソ連のスパイ尾崎」という冷戦期の反共宣伝にも使われる。むしろ「ソ連だけでなく世界を救おうとした英雄」というように位置づけていただいた方が本当はよかったのではないかと、今日的には思っています。

## 旧ソ連秘密資料公開で修正されるゾルゲ像

ソ連におけるゾルゲ像が修正されるのは、1989年に東欧で革命が起き、ベルリンの壁が崩壊し、冷戦が終わって、91年ソ連解体に至るゴルバチョフからエリツィンの時期に、大量の旧ソ連秘密資料が出てきたときです。私は、それらを用いて、昔スターリンの治世下で粛清され殺された日本人の記録を追いかけてきました。

その過程で、ゾルゲ事件についても、例えばモスクワに残っていたゾルゲの奥さんの記録とか、日本からモスクワに送られてモスクワで実際に受け取った電報や暗号報告の記録等々が出てきました。これらは、91年にNHK現代史スクープドキュメント「国際スパイ・ゾルゲ」という番組に制作され、下斗米伸夫さんが編集し本にしています（『国際スパイ ゾルゲの真実』角川書店 1992年）。ここには、ゾルゲが日本の警察に対して述べた話ではなく、それまで日本ではわからなかった、実際にモスクワに送られたゾルゲの報告類が入っています。

白井久也さん、渡部富哉さんらの日露歴史研究センターは、2000年9月に、モスクワで第2回国際シンポジウム「リヒアルト・ゾルゲとその盟友たち」を開き、ここにおられるフェシュンさんらから、ロシアにおける新しい研究が報告されました。例えば1964年にフルシチョフの気まぐれで名誉回復されたかのように言われてきたゾルゲの顕彰も、問題はそれほど単純ではなかった。勲章を渡すためにはそれなりの調査と評価をしなければいけませんから、実際に生存していた当時の関係者から聞き取りして名誉回復が決まり、「ソ連邦英雄」の称号授与となったことがわかった。

そこで大きな問題になったのは、ゾルゲがモスクワに送った情報は、はたしてスターリンまで届いていたのか、信用されていたのか、という問題です。本当はどこまでいていたのか。当時の赤軍第4部の中で日本問題を扱っていた担当者たち、暗号解読官らはゾルゲを信頼していたけれども、その上の上司日本課長らは「ゾルゲはどうも大酒飲みで女たらしでありあまり信用できない」と言っていたなどという記録が、詳しく出てきました。ロシアで作られた英雄ゾルゲ像でさえ、単純な形で作られたものではないし、また記録的な裏付けから見れば、それとは別のゾルゲ像、ドイツの二重スパイと疑われたゾルゲ像さえ出すことも可能な、極めて貴重な記録が含まれていることが、われわれにも分かってきた。

本日はじめて、それらの延長上で、在日ロシア連邦大使館が、ゾルゲ事件についての学術シンポジウムを開催する運びとなり、しかも私のような、旧ソ連についてはずいぶん批判的なことを書いてきた者が呼ばれて講演できるようになったのです。ロシアにおいても、ゾルゲ事件を客観的に見る流れが生まれてきていることが重要です。

## 英米の研究は東西冷戦史と米ソ世界戦略に注目

今日は3つの物語ということで、最後に米国、英国など英語圏の流れについてお話しします。先程英語圏ではどうも話が違うようだと言いましたが、これはマッカーシズムと密接に結びついた形でゾルゲ事件が知られるようになり、かつ、学術研究もその流れの中で展開されてきたからです。イデオロギ-的に見れば反共、隠れ共産主義者の摘発、ソ連のスパイ活動の米国内での摘発、および米国人の関わりを非米活動として告発し処罰すると

いう性格を持っています。

私のような研究者の立場からすると、このアメリカ風のゾルゲ事件の扱いには、ある種のメリットがあります。それは何かというと、国際共産主義の諜報活動は、モスクワの指令で東京だけで行われているわけではなく、世界中で進められていたと前提している。ゾルゲは既に1920年代からコミンテルン、赤軍で世界的な規模での情報活動に従事していた。1930年代の初めの数年間は中心舞台が上海で、外国人が出入りしても怪しくない租界で、ソ連の諜報団が多くの人と知り合い、その中にアグネス・スメドレー以下、のちの中国革命で重要な役割を果たす米国人がいる。そのグループの一部が日本にやって来て、ラッキーにも尾崎秀実という日本の政権中枢の近くにいた人物をグループに加えることができた。それが41年の日米開戦直前のソ連にとって軍事的に役立つ情報に結実したけれども、こうした共産主義の諜報活動そのものは1920年代末から40年代に及び、しかも、ゾルゲ、尾崎が死刑になったあとの49年、つまり新中国が生まれるまで、アジア地域でずっと続いていたという観点で、資料収集や調査分析が行われている。

したがって、米国のゾルゲ事件の位置づけは、あくまでグローバルな東西冷戦史、国際情報戦の一環です。ソ連もアメリカも世界戦略・アジア戦略を持っていて、ゾルゲ・尾崎諜報団はソ連側・東側の諜報戦の成功例だった。もっと正確に言えば、NKVDからKGBに受け継がれる世界的な諜報活動の一齣に、ゾルゲ事件は位置づけられる。ゾルゲは赤軍諜報部であって内務省系列でないとか、コミンテルン系列ではないと言いながら、ソ連は世界戦略の中でそれらを使い分けながら、世界中から情報を収集していたその一部だった、というわけです。

私がやっている研究で言いますと、日本共産党の戦後の英雄である野坂参三が米国西海岸で行っていた活動と、日本でゾルゲが行っていた活動、上海でスメドレーが行っていた活動は、1935-36年頃には、一つの系列の3国での動きに見えてくるわけです。野坂とゾルゲは直接会ったことはないかもしれない。しかし、モスクワから見れば、大きな情報収集活動の一部として彼らは動いていた。しかもそれは、スパイ活動といわれるけれども、例えば野坂は戦後中国から帰って「愛される共産党」の英雄になるわけです。亡命16年だけでも、反戦平和の英雄として扱われます。同じような活動をしていた尾崎、ゾルゲは、たまたま戦争前に捕まってしまったのでスパイということにされてしまいます。しかしやっていた活動の質は同じだということが、大ざっぱに見えてくる。もちろんウィロビー報告や米国の報告に、直接そうは書いてありませんけれども、米国の記録を裏側から見るとそういうことになります。

つまり、ゾルゲ事件を時間的に長く取って、1920年代から50年代までのタイムスパンの中に置き、空間も東京やモスクワという地点に限定しない。確かにウィロビーは上海に目を付けたけれども、そのころ中国大陸では汎太平洋労働組合会議といって、ソ連の影響下のプロフィンテルンという国際的な労働組合組織が、米国共産党を通して、上海ばかりでなく武漢や天津でもアジアにおける労働者組織のために活動を行っていた。機関誌『汎太平洋労働者』を発行し、その指導者たちは、30年代を通じて米国共産党書記長であるR・ブラウダーら、のちに米国共産党の幹部になっていきます。この活動とゾルゲ事件が一体のものとして見えてくるというメリットがあります。

米国では、マッカーシズムの最中にウィロビー報告が作られ、ソ連の世界的なスパイ活動の一環としてのゾルゲ・尾崎事件という大枠が設定され、しかも上海、東京だけでなく世界中にスパイ網があった、ワシントンにもあるかもしれないという形で宣伝された。またそういう宣伝ができる材料を、彼らなりに集めていました。

そうした第一次資料が、2000年のクリントン政権末期に、ナチスと日本の戦時中の記録について、基本的には全部機密解除し情報公開されることになり、いま私は、毎夏ワシントンに通っています。要するに、それまで関係者がまだ生きているからということで未公開だった記録が、ワシントンの国立公文書館で見られるようになりました。それを見ていきますと、ウィロビーが集めた資料とか、ウィロビー報告に書かれたことの背景が見えてきて、次々と新事実がでてきます。第二次世界戦争当時の米国の世界戦略、米国が当時ソ連をどう見ていたかがある程度わかり、冷戦の歴史の始まりのところで、ゾルゲ・尾崎事件が極めて重要な役割を果たしたことが見えてきます。

### 民族解放運動に着目したチャルマーズ・ジョンソンの研究

一つの例で言いますと、例えばゾルゲ・尾崎事件についての米国で出された本は、ウィロビー報告を除けば、本格的な研究書が2冊あります。一つはゴードン・プランゲの本、もう一つはチャルマーズ・ジョンソンという「MITI and the Japanese Miracle」(邦訳『通産省と日本の奇跡』TBSブリタニカ、1982年)の著者で、日本の産業政策分析で有名な日本学者の若い頃に書いた本です。両方とも日本で翻訳が出ています(注ゴードン・W・プランゲ『ゾルゲ・東京を狙え』新装版 上下 原書房 2005年/チャルマーズ・ジョンソン『尾崎・ゾルゲ事件-その政治学的研究』弘文堂新社 1968年)。

チャルマーズ・ジョンソンは、反共的共産主義研究で有名なスタンフォード大学フーバー研究所にいたことがあり、インターネット上では「元CIA顧問」とでてきますから、そのつもりで読むと確かにそういう面はあるのですが、研究全体は結構真面目な学問的内容です。いまから読み直して見ると、ソ連で1964年の秋にゾルゲが名誉回復される半年前に、米国ででた本です。ですからジョンソンは、65年の日本語版序文や90年の「増補版」で「私の本が出たのでソ連もついに屈服し、ゾルゲの存在を認めた」と言います。

ウィロビーとはっきり違っているのは、ゾルゲ・尾崎はソ連のスパイであったかもしれない、確かにそういう活動をしていた。しかし、彼らは同時に、アジアの民族解放運動の戦士であった。彼らは中国の民衆に共感し、植民地の人々は帝国主義に抗して自立を遂げなければならないと主張し行動した人々だと位置づけるのです。第二次世界大戦当時のルーズベルト大統領の「4つの自由」の1つにも重なるわけです。米ソが共にたたかった反ファシズムの大枠の中で、とりわけ中国人民に対するある種の共感を持って活動したのがゾルゲ・尾崎だったのだという視点をはっきりと打ち出しているのが、チャルマーズ・ジョンソンです。90年の「増補版」に50ページほど書き足された部分には、「実はベトナム戦争を見通していたんだ」ということも書かれています。

### プランゲの本はウィロビー報告の続きで「東京編」

プランゲの方は、日本では「プランゲ文庫」と言って、戦後占領期の日本の新聞雑誌検

閲資料を収集し公開したことで有名です。ただこの人の本についていろいろ辿ってみると、活字で初めて発表されたゾルゲ・尾崎事件についての論文は、『リーダーズ・ダイジェスト』に出ました。当時の『リーダーズ・ダイジェスト』は、米国の反ソ反共政策の機関誌みたいなもので、イデオロギー的性格の強いものです。さらに、GHQ-G2のウィロビーの下に作られたマッカーサー戦史室というのがあり、日本人で言いますと、有末精三、服部卓四郎、河辺虎四郎ら旧軍人を、米軍が戦犯訴追しないでこっそり囲い込んでいた。これら旧軍情報将校たちから、中国や朝鮮の共産主義情報を取っていたわけです。

そのマッカーサー戦史室の米国側の公式代表がプランゲで、元はメリーランド大学の教授でした。インタビューした相手は、ゾルゲの愛人石井花子や吉河光貞、つまり事件の検察取り調べ側の代表です。荒木光子という、戦史室の日本側公式代表だった荒木光太郎教授の妻で、当時ウィロビーの愛人と呼ばれた女性が、重要な証言者として登場します。こういう人たちの話がプランゲの本のベース、つまりウィロビーと情報源は同じです。

ウィロビー報告は、スメドレーを中心とした上海での米国人の諜報活動をターゲットにしたのですが、プランゲの本は、ウィロビー報告で使わなかったウィロビー収集資料をもとにしたその続編、東京編というべきものです。ウィロビーの視点で、上海ではウィロビー報告の通りだったけれども、「東京でゾルゲ・尾崎はどんな悪いことをやっていたのか」という観点で書かれています。つまり、チャルマーズ・ジョンソンとプランゲの米国でのゾルゲ本は、ゾルゲ・尾崎の活動の評価では、180度とまではいわないまでも、相当違っているわけです。

それを中和する形で出ているのが、1966年に英国で出ましたディーキン＝ストーリーの本です。日本語訳が出ています（注 F. W. ディーキン＝G. R. ストーリー『ゾルゲ追跡 リヒアルト・ゾルゲの時代と生涯』1967年 筑摩書房 / 同『ゾルゲ追跡』上下 2003年 岩波現代文庫）。これはわりと中立的に、実証的に書かれていますので、学術的にはこの本が世界で一番信頼され、受け継がれています。

その延長上で、いま世界的に広く普及しているのが、1996年に米、英で発行され、2000年からペーパーバックが出たワインマンの本です。日本でも西木正明さんの訳が出ています（注 ロバート・ワインマン『ゾルゲ 引き裂かれたスパイ』1996年新潮社）。これも、よく取材し、資料にもあたっています。

なお、ドイツでゾルゲ事件の研究が少ないのは、ひとつは前述したソ連の名誉回復にしたがったのが東独の研究で、その東ドイツがなくなったという事情があります。より本質的には、ソ連のナチス・ドイツに送り込んだスパイは、日本など到底及ばない多数で、ゾルゲの在日ドイツ大使館経由より確実に信頼できるナチス情報は、主要にはトレッペルの「赤いオーケストラ」などドイツに送り込まれたソ連の対独諜報網から得られた事情があります。ドイツにとって、当時の同盟国とはいえ、日本は遠い国だったのです。

われわれは、いまロシア大使館でこういう形でゾルゲ事件について話し合っていますが、世界中にそれなりに事件に関心を持つ人たちがいて、そこでのゾルゲ像は、日本で作られた尾崎＝ゾルゲ像、米国で反共的に作られたゾルゲ＝スメドレー像、それからソ連で作られた英雄ゾルゲ像、これらが重なりあい、戦いあっている。こういう状態です。

## 望まれる中国共産党による上海租界の資料公開

では、どうしたらいいのか。こういう状況の下で、私たちはゾルゲ事件をこれからどう解明していけばよいかについて、簡単に申し上げます。

第1は、これまで出ているゾルゲ事件について知られているものは、単に著作のみならず、資料も含めて、まだまだ偏りがあるということです。米国で情報公開法に基づいて出てきた資料を見ますと、いままで知られていなかった事実がたくさん出てきます。ウィロビー自身が報告書に書いたのは1冊だけですけれども、そこに書かれていない資料も当時大量に集めていたことが、分かってきています。

旧ソ連についても、フェュンさんを中心に、新たな資料が発掘され、このあとご報告があると思いますが、ロシア側でも新しい研究が進められてきています。そういう意味で言えば、本格的にゾルゲ事件を研究する条件が、ようやくできてきている。

ただ、それでも決定的な欠落があります。それは、ゾルゲ・尾崎事件をもっと長いスパンで見るときに重要なのは、実は1930年代前半の中国です。中国時代のゾルゲ・尾崎関係の資料が、中国共産党中央档案館その他から一切まだ出されていない。中国には本格的な研究そのものもない。この状態を何とかしないと、本当のゾルゲ・尾崎グループの活動の真相は見えてこないと思われます。

日本でも、みすず書房『現代史資料 ゾルゲ事件』所収の裁判資料には、肝心なところでいくつか重要なもの、日本軍関係者の供述を含め、あつてしかるべきもので見つからないものがあるわけです。こういうものを何とか埋めていく努力が必要です。米国や旧ソ連からようやく基礎資料が出てきたわけですから、日本や中国も、それにふさわしい研究条件を整えることが必要な第1点です。

第2は、これまで知られてきた事実そのものでも、未解明な点が無数にあることです。ゾルゲ・尾崎の活動は、1929年から1941年までまたがっており、まだまだ解かれるべき謎はいっぱいあります。ゾルゲと同じころ日本に来ていたアイノ・クーシネン（赤軍第四部諜報員）は、秩父宮ら皇族の方に取り入っていましたが、ゾルゲ事件では捕まっています。その後彼女は、ソ連に帰国してそのままラーゲリ入りの不幸な生活をして、回顧録を書いています。日本についての記述はごく一部に留まっています。彼女の手記の中には朝日新聞の中野という記者と親しくして情報を得たと書いていますが、そういう記者のことを追いかけていけば、まだまだ探究できる筋があると思われます。

ギュンター・シュタインという名前を聞いたことがあると思いますが、ゾルゲ・グループの協力者と認定されたけれども、すでに離日後で捕まらなかったユダヤ系ドイツ人記者がいます。上海でゾルゲと一緒にいたゲアハルト・アイスナーは、戦後東独で活動しています。ジェゼフ・ニューマンについてはある程度分かるようになってきましたが、当時ゾルゲと同時期に外国人記者クラブに出入りしていたジャーナリストたちは、いろいろな意味で、単にゾルゲに協力したかどうかではなく、それぞれにいろいろな国の利害を持って働いていたジャーナリストです。戦時中の日本の同盟通信もそうでした。フランクフルター・ツァイトゥングのゾルゲの同僚リリー・アベックについても、ほとんど研究されていません。そういう人たちを、丁寧に調べて見ていく必要があるのではないかと。

尾崎の供述書の中で、自分とゾルゲを初めて引き合わせたのは鬼頭銀一という日本人だ

と出てきますが、この人は、米国共産党日本人部の指導者の一人です。ゾルゲがそんな有名な共産主義者とは上海では距離を置いていたと供述したために、尾崎の当初の供述が訂正され、判決文には入らなかった。代わりにアグネス・スメドレーが仲介者とされた。このため全く研究されてこなかったんですが、これは私が10年ほど前から追いかけて、三重県出身のちゃんと実在した人物で、尾崎が上海から日本に戻った後も大阪・神戸でたびたび会っていたことをご遺族に残された遺品と証言からつきとめました。事實は、尾崎が当初の供述で言っていたとおりで、ゾルゲと尾崎の最初の紹介者は、スメドレーではなく、日本人のアメリカ共産党員鬼頭銀一だったということが分かっています。

この種の事実関係の問題が、いくつもあります。こういう謎解きに非常に便利なのが、つい最近日本語で翻訳の出版した『ヴェノナ』(PHP 研究所) という本です。これは、第2次世界大戦前後の米国におけるソ連のスパイ活動について、暗号文を全面的に解読して作られた本です。解読・分析したグループは、同時にモスクワの旧ソ連秘密文書を収集してきた学者たちで、可能な裏付けをとっており、学術的にも信頼できます。これを見ますと、ゾルゲ・尾崎事件よりはるかに大きな規模で、アジア問題を担当する重要なソ連スパイが米国国務省とか国防省、あるいは民間企業の中にいっぱいいたことがわかります。その判明した名前も、いままで私などほとんどノーマークだったような人物(たとえば「チャイナ・コネクション」とよばれるフランク・コーやソロモン・アドラー)で、それがゾルゲ・尾崎グループとは別に、中国情報に関わるグループを指導していた。さらにその上に政府の要職にある財務次官補ハリー・デクスター・ホワイトらがいて、モスクワに情報を流していた例が出てきます。このように、未解明の研究対象は無数にあります。

### **愛国者であると同時に国際主義者であるゾルゲ・尾崎秀実**

最後に一言申し上げて、おしまいいたします。先ほど言ったように、ゾルゲ・尾崎については、旧ソ連のスパイ、日本の売国奴ということで扱われてきました。それに対してロシア側が、「いやゾルゲは大祖国戦争の英雄だ、スパイだけど英雄だ」というのでは、少なくとも日本ではもの足りないのでありまして、ロシアだけでなく「文明」世界を救った戦士だったんだという線で、ぜひゾルゲについても、尾崎についても、さらに資料を発掘し、研究をすすめていただきたい。愛国者であることと国際主義者であること、世界平和を目指すこととナチスや日本軍国主義とたたかうことは別に矛盾しなかったんだという事例として、ゾルゲ・尾崎事件を見ていただきたいと思います。

そのために、ひとつ提案があります。インターネット上に、どなたかが英語で研究サイトを一つ作りますと、そこにみんながアクセスして、世界中からゾルゲについての研究や新事実・新資料を提供する、そういうウィキペディア風の学術センターが生まれれば、世界中の研究者が、新しい情報を共有して共同研究を進めることが可能な時代になっています。こういうことこそ、私は現代的な情報戦の英雄を研究するのにふさわしい、21世紀にゾルゲを讃えるあり方ではないかと思います。以上で、私の話を終わります。